

上海租界のフランス語新聞 *Le Journal de Shanghai* が報じた日本文化

趙 怡

はじめに

アヘン戦争後に開港された上海は、中国の行政権力が及ばない、イギリス人中心に運営された共同租界とフランス専管によるフランス租界が並立し、拡張を繰り返しながら東洋一の国際自由都市に発展した。また日本の進出と侵略により、上海は部分的に、ついには全面的に日本の支配下に置かれ、多い時は10万人もの日本人が上海に暮っていた。そのほとんどが北部の虹口^{ホンキュー}地区に住み、周囲一帯は日本の企業、商店、病院、劇場が集中し、日本人学校、寺院、神社も完備された。日本総領事館、海軍陸戦隊、日本人巡捕（警察）、日本人居留民団といった縦割りの組織も、在留居留民を保護する機能を果たしていた。行政上は共同租界の一部だったとはいえ、実質的な「日本租界」として欧米人統治下の共同租界とフランス租界に相対し、さらには凌駕したのである。

このような背景もあって、中国では長年反帝国主義・反植民地主義の立場から上海租界史研究が批判的に行われ、日本では日本人居留民への関心に集中する傾向があった。近年においては欧米外国人居留民、とりわけユダヤ人や白系ロシア人に関する考察も増えてきたものの、フランス租界に関する研究が不足しており、とりわけフランス語資料に基づくものは僅少である。上海で長らく発行されていた『ル・ジュールナル・ド・シャンハイ』（*Le Journal de Shanghai*, 1927-1945）も、これまではほとんど「死蔵」されてきた。しかし豊富な文化欄を持つこの日刊紙は、フランス租界の様相をリアルタイムに報告する貴重な資料源とともに、国際都市で繰り広げられていた東西文化交流の実態を表す宝庫でもある。筆者はこれまで主にこの新聞が報じた中国文化（音楽、美術、映画、文学など）について検証してきたが¹⁾、本論では日本文化に関する記事について考察したい。

1) 拙稿「ライシャム劇場における中国芸術音楽——各国語の新聞を通して見る」（大橋毅彦ほか編『上海租界の劇場文化』2015年4月）、「上海租界のフランス語新聞が報じた中国映画とスターたち」（中国ジェンダー研究会編著『中国の娯楽とジェンダー』2022年2月）、「上海租界のフランス語新聞にみる近代中国美術——林風眠と杭州国立藝術院を中心に」（瀧本弘之・戦暁梅編『近代中国美術の境界』2022年4月）（以上ともに勉強出版）などを参照されたい。

I 上海のフランス租界とフランス語新聞

第一次世界大戦や国内の動乱を経て、上海は1927年、民国政府の特別市となり、翌年首都の南京移転によって地の利も高まり、以降の10年間は発展の黄金期を迎えた。世界各国からの投資を受けて様々なスタイルの高層ビルが立ち並び、西洋式の教会、学校、病院、劇場、映画館、ダンスホール、そして住居が建設され、あたかもヨーロッパの街並みの一角をそのまま再現したかのような地域が多数現れた。ただ雄壮なビルが林立するバンドと幾つもの大型百貨店が対峙する南京路を有する共同租界や、蘇州河に跨がるガーデンプリッジの北にある、長崎を彷彿させる虹口の日本人居留民街に対し、フランス租界は文化の街として発展したことが異なる。都市建設が厳しい管理のもとで進められ、舗装された道路が街路樹に彩られ、庭付きの高級洋館が立ち並び、劇場や映画館も点在する。

もっともフランス一国の専管で、駐上海総領事が行政機関である「公董局」の長を兼務しているフランス租界は、イギリス人主導でありながら各国の居留民が管理に参加した共同租界よりも、祖国との関わりが強かった。しかし数万人に及ぶ英米居留民や日本人と比べ、3000名を超えることがないフランス人居留民の数の劣勢が、租界運営にも大きな影響を与えた。経済的な利益を求めて高圧的な植民地政策をとっていた共同租界とは異なり、フランス租界当局は街の建設や文化教育により力を入れた。その背後には文化を重んじるフランスの伝統や、長年にわたって布教活動をしてきたイエズス会の影響に加え、中仏政府主導のフランスへの留学運動と一連の教育合作事業も実った結果があると考えられる。かつて留学運動に関わっていた者が国民政府の高官になり、フランスで学位を取った人々の帰国先もほぼ上海だった。街並みだけでなく、文学、美術、映画、演劇、音楽、ファッションに至るまで、上海は世界、特にパリの新しい潮流を吸収し、「東洋のパリ」の異名を得た。そして文化を重視する姿勢は、フランス語新聞の特徴にも繋がった。

『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』は、1927年12月にフランスの大手新聞社に勤めていたフランス人ジャーナリスト、フォントノワ（Jean Fontenoy, 1899-1941）により創刊された。1929年5月フォントノワが離職してからは副主筆モレテ（Goerges Moresthe、生没年不明）が長年主筆となる。数万部にも達する日本語新聞や、1万部近くに及ぶ英字新聞に比べると、発行部数が2000部前後だったと思われる弱小新聞社は、ニュース報道を世界の大新聞社に頼らざるを得なかった。それを補うものは、優れた文芸誌にも遜色ない文化欄である。大衆向けの映画、演劇、小説だけでなく、ほかの新聞には少ない芸術音楽、バレエ、美術、文学関係の記事、評論、翻訳、また原作も多く掲載している。1932年10月25日より、新聞の1面に「法文上海日報」という中国語題名が記されるようになった（本論ではこの時期以降のものはこの題名を使う）。また1933年からは美しい図版を多く含む長文（2面、時には3面以上）を特色とする日曜特集（12面前後）も登場した。そこにはフランス租界や上海、中国だけでなく、アジアを含む世界各地の風景民俗、社会歴史、

文化芸術、詩歌小説などもカバーする優れた作品が数多く見られる²⁾。そしてこの時期には数こそまだ少ないものの、日本文化に関するものも含まれている。

II 観光地としての「日本の印象」

上海から長崎まで汽船で1昼夜で到達できる利便性に加え、夏は高温多湿で自然も乏しい上海に比べて、気温が数度も低く風光明媚な日本列島は、上海在住の外国人にとって絶好の休暇先である。1929年8月11日の日曜日に、編集長のモレテがすでに「日本にて、雲仙の印象」(《Au Japon Impression d'Unzen》, 4面)を書いている。フランス人にとって馴染みやすいロチの『お菊さん』や、プッチーニの『蝶々夫人』の舞台にもなった長崎の話題から入り、近くにある雲仙についての印象を読者に向けて語っている。老若男女が皆フレンドリーで外国人にとって安全な街であることや、大都会のホテルには及ばないものの、美味しいすき焼きを提供してくれる日本宿などは、読者には魅力的に違いない。また、近代化への道を進めると同時にいかに伝統を守るかという問題提起もした。5面の右側には雲仙の山々の風景と日本宿を写した4枚の写真が並んでいる。9月1日の紙面には雲仙で弓道をする人々の姿と記事も見られる。さらに10月6日には、「日本の風景」と題された16枚の写真が新聞一面を飾り、奈良、京都、大阪、日光、精進湖、東京の観光名所が映っている。その後も夏になると日本各地の風景がよく取り上げられている。

1933年を境に、美しい図版を多数加える長編記事が、日曜特集(パリ祭やクリスマス特集を含む)の目玉となった。最初の二年間は中国の風土と文化を紹介するものが大半を占めているが、日本の紹介も一部見られる。まず目を引くのは、1935年12月29日にある「日本に対する印象」である。冒頭の説明によると、これは極東を周遊したフランス人記者シュレバー(Emile Schreiber, 1888-1967)がパリで出版した近著『1日1フランで生きる—インド、中国、日本』(*On vit pour un franc par jour -Indes, Chine, Japon*, 1935)の一部だった。

作者はまず上海に上陸した時に目にした苦力に言及し、「惨めで、ボロを纏い、素足で重い米の荷物を背負って腰が二つ折りになってしまう」にもかかわらず、ちょっとでも休憩の時間があると「子供のように仲間と一緒に歌ったり楽しんだりした」と述べる。しかし神戸では、「このような悲惨さはないが、この種の楽しさもなくなった」という³⁾。苦力

2) 新聞の概要については拙稿「研究上海法租界史不可欠の史料宝庫—《法文上海日報》(1927-1945)」(馬軍・蔣傑編『上海法租界史研究』第2輯、2017年12月)を参照されたい。なお所蔵状況は以下の通りである。①フランス国立図書館(BnF)(1928年1月-1940年5月。ほぼ欠落なし)。2012年BnFは筆者が参加していた「ライシャム劇場研究班」の要望に応じて、日本の科研費も利用して所蔵分をデジタル化して、現在ホームページ上で公開している。②上海図書館徐家匯藏書樓(1927年12月-1944年3月。欠落部分あり。デジタル化進行中)。③京都大学文学研究科図書館(1942年4月-1944年11月。欠落部分あり)。

3) Emile Schreiber, 《Impressions sur le Japon》, *Le Journal de Shanghai*, le 29 décembre 1935, p.5. 筆者訳、以下同。以下この新聞による引用は、文中に日付と頁数を明記し、注を省略する。

に関する描写は芥川龍之介の『上海游记』（1921）を想起させるが、中日に対するフランス人記者の第一印象の対比は興味深い。彼は神戸の人の着衣にも注目し、若い女性の鮮やかな着物姿に見惚れつつも、男性の着物に山型帽という「甚だ合わない」格好には閉口した。またほとんどの子供たちが教育を受けられることや、ホテルの洋食の安価には感心した。夕食後、日本在住のフランス人に伴われて東京へ行くが、遅刻のない、清潔で快適な汽車での旅も満喫した。そして汽車の食堂で聞いた同伴者の語りという形で、日本の歴史と現状についての議論を長々と書いている。とりわけ長い歴史を有する天皇制の特徴と日本人が持つ天皇への忠誠心を紹介し、それが社会主義や共産主義のような革命が日本では起こりにくい理由だと述べている。記者はまた車内、のちに街や映画館や劇場などでも顔を黒いマスクで覆う人たちを見かけるが、それは傷痕を隠すためでなく、人目から顔を隠すまたは風邪を予防するためのものだと告げられた。「大変醜い」が、「防疫には良い効果をもたらす」（10面）と描かれたその黒いマスクは、日本でも大流行していたスペイン風邪の名残であったが、1930年代の日本ですでに定着していたように見える。

翌朝に到着した東京駅には軍人と警察が溢れている。ちょうど満洲国の皇帝が日本を離れる日だった。前年に「満洲国皇帝」に即位した溥儀は、4月に訪日し、7日より15日まで東京に滞在したので、作者はその出発を目撃したわけである。タクシーで宿泊先へ向かう途中、皇帝一行を見物する民衆を見かけるが、大勢の警察に管理されている街の様子は、まるで「死の都市」を経過したような印象を与えた。そして日本のミカドも見なくなった作者は、駐日フランス大使のアドバイスに従い、園遊会に参加した。6000人に及ぶ外国人と上流社会の紳士淑女に混じって暑い陽射しの中で待ち続けたものの、にわか雨のため天皇の来園が中止されたという。実際当日の新聞にも「観桜御会 光栄の8000名 今を盛りの桜花 聖上、行幸御取止め」と題する記事が掲載されている。正午から「岡田首相、各国務大臣、各前官礼遇、枢密顧問官、陸海諸将星以下文武百官及びその夫人、令嬢、並びに特に召された民間功労者、発明家のほかにベルギー大使バツソンピエール男をはじめ各国大公使館員夫妻など約八千余名礼装晴れやかに陸続として新宿御苑に参入、続いて秩父宮、同妃両殿下、各皇族方も御参苑になり」⁴⁾ という盛会ぶりだった。

天皇の威厳と日本の上流社会の様子を垣間見た作者は、次に歌舞伎と宝塚劇団に関心を寄せた。新聞には晴々しい表情を見せる洋服姿の女優たちの写真が7枚も掲載されている。それは、「最後の元老」である西園寺公望の軍服姿の写真とともに、西洋化された日本の一面を示している。そして丸の内に立ち並ぶ西洋建築群と皇居の静かな佇まいとの対比も印象深い。ほかにも小学校の授業や女工宿舎の様子、幼稚園の給食時間と女子校の武術授業など、日常生活の一コマ一コマが、生き生きと写っている。西洋を「コピー」しつつも、独自の伝統と制度を守る日本の姿は、この長文と多くの写真によってかなり具体的に伝わったといえよう。（図1）

4) 『読売新聞』1935年4月24日（水）夕刊、2面。



図1 シュレバー「日本に対する印象」(1935年12月29日, p.5, p.10)

1936年8月16日と10月11日には「日本にて」(《Au Japon》)と「日本風景」(《Paysages japonais》)の2篇(作者はともに Elsa Haim)が掲載されている。こちらは上海から長崎に上陸し、九州、四国、名古屋、琵琶湖と京都などを周遊した旅行記である。作者は言葉を知らない外国人への日本人のホスピタリティー、自然への調和の精神、生花や盆栽などの日常生活に宿る芸術性を称賛した一方、その近代化に対してはむしろ否定的だった。ただ熊本や弘前などの地方の風景、旅館の和室の様子、生花などの写真も含まれており、これまでの日本に対する印象の幅はより広がった。また夏に限らず、1937年4月11日にはアルプス山脈のスキー場に関する長編記事も、多くの美しい写真とともに2面にわたり掲載されている。

この時期のものとしてもう一つ取り上げたいのは、1934年7月14日に掲載された、芥川龍之介の短編小説「秋」の仏訳である。パリ祭を祝う90ページにも及ぶ大型記念特集だが、上海のフランス租界を紹介する長編記事から始まり、中国各地の風景、フランス留学経験者である若き汪兆銘(1883-1944)の詩篇、中国政府のエリートたちの面々、ならびにアジア、アフリカ各地の風俗文化についての紹介記事が、多くの図版とイラスト付きで掲載されている。「民国黄金10年」の最中にある上海文化の豊かさだけでなく、世界各国の文化を独特な視点で取り上げる新聞の文化欄の特徴も如実に現れた一巻である。ただ日本関連の記事は少なく、また欧米諸国が船に乗って中国の海で「静かに釣りをしている」のに対して、日本という大きな水鳥が水面下に頭を突っ込んで魚を取ろうとする漫画(68面)も掲載されており、中国を虎視眈々と狙っている日本への批判も読み取れる。その中で三面にわたる挿絵付きの芥川龍之介の作品翻訳は一層際立つ。なお「現代日本文学」という題目は、この年の1月から始まる「今日の中国文学」と対になっている。フランス留学帰りの徐仲年(Sung-nien Hsu, 1904-1981、別名頌年)が、1年間を通して魯迅をはじめとする中国文学者の人と作品を13回にわたり翻訳紹介することと関連があったのだろうか。(図2)



図2 芥川龍之介「秋」を掲載する紙面（M.Thomassen 挿絵、Humiko Sioden 訳。1934年7月14日，pp.38-40）

なお1936年2月9日の日曜特集には「日本の工業」と題する長編記事も見られる。翌年の3月7日にも、開催中のパリ万博にある日本館の様子が映った一連の写真は、パノラマ式で繋がり、紙面の上方を飾っている。西洋列強に伍するために近代化を急ピッチで進めた日本の近代工業に対するフランス人の関心が伺える。

Ⅲ 報じられた日仏文化交流

1 上海を結節点とした仏・中・日間の文化往来

戦間期ではツーリズムの発展と相まって、世界中の物的、人的移動が激しくなり、グローバル的な様相を呈した。多国籍の人種と文化が雑居する上海は、まさに東西文化が交流する絶好の場となった。著名な文化人を始め、世界の美術家や音楽家たちがツアー先の一つとして上海を選び、その前後に日本に寄るものも少なくなかった。日本には来訪したフランスの文化人との交流の場として、東京日仏会館（1924年設立）と関西日仏学館（1927年京都の九条山に設立）があった。ともに中国で長年の外交活動を経て駐日大使となったポール・クロードル（Paul Claudel, 1868-1955）の尽力によって設立された施設だが、早い段階から上海でも知られた。仏語紙も、1929年11月3日にすでに関西日仏学館を紹介する記事を写真付きで掲載している。先の芥川作品の文末にも、訳者について「Humiko Sioden 嬢、関西日仏学館（京都）の卒業生」と記している。1936年5月、関西日仏学館が九条山から京都市内に移転され、6月14日の日曜特集では、「関西日仏学館開館」（《L'Inauguration de l'Institut franco-japonais de Kyoto》）と題する記事が含まれる。学館の創設と変遷から、建物の様子、重要人物のスピーチを含む開館セレモニーの詳細、寄贈品のリストに至るまで、多くの写真を加えて4面にわたり報告している。さらに翌年の1月10日には新しい学館での記念行事を報じる「京都にて日仏セレモニー」

《Cérémonie franco-japonaise à Kyoto》）や、1月17日に「東京日仏会館」（《La Maison franco-japonaise de Tokio》）に関する詳細な報告も見られる。

一方、上海における中仏文化交流のプラットフォームとして、アリアンス・フランセーズは中心的な役割を果たしている。中国総代表はフランス租界の公立校校長が兼任することとなり、1921年頃よりそれを務めたのはシャルル・グロボワ（Charles Grosbois, 1893-1972）だった。ソルボンヌで古典文学を学んだ彼は、1919年上海に来てすぐに中国のフランス留学運動に参加し、その後も校長だけでなく、租界公董局の教育部門の長となり、長年教育文化のトップとして中仏文化の交流に尽力した。1931年時点のアリアンス・フランセーズの組織を見ると、フランス総領事が名誉会長を兼任し、主要メンバーの中には李石曾、褚民誼、王景岐（元駐ベルギー公使）など、フランス留学運動の推進者で中国政府の有力者たちも入っている。1933年末、グロボワの努力のもとで「中法聯誼会」も誕生し、中仏両国の著名文化人が多く加入した。さらにフランス語新聞もラジオとともにアリアンス・フランセーズの傘下に収められ、文化欄の大幅な充実につながった。新聞の創刊当初から理事として運営に関わったグロボワの影響力も大きかったと考えられる⁵⁾。

フランス学校の構内に併設された上海アリアンス・フランセーズは、租界中心地の環龍路（la route Vallon, 現南昌路）に位置しており、フランス公園に面している横長の雄大な校舎（現科学会堂）は、600人を収容できる講堂と大小の会議室を有している。近くにあるフランス・クラブと公董局のホールとともに、フランス居留民の主な社交場となっただけでなく、中仏の文化交流の場としても開放されている。来滬した世界の文化人を迎えて、講演会、美術展、演奏会などを開くこともしばしばであった。そしてこれらの催しの詳細は常に新聞やラジオを通して報告され、歴史の記録としても絶好の史料となる。

1933年だけでも、3月に著名な中国学者ポール・ペリオ、10月にフランス前文相、パリ日仏協会会長の André Honnorat などが中国から日本、または日本から中国へ訪問したことは、『法文上海日報』や中国語の新聞『申報』、さらには『日仏文化』の「日仏会館消息」からも確認できる⁶⁾。1934年1月28日にも作家 Maurice Dekobra の「日本の印象」が掲載されている。美術家や音楽家の来訪においては、枚挙に暇がない。

2 敏腕女性記者が描いた日本の伝統芸能と文化人

上海は日中間文化交流の舞台でもあった。魯迅、郭沫若、田漢など、中国近代文学の担い手には日本留学経験者が多く、内山完造など上海在住の日本人を通して、文化交流が盛んに行われていた。ビザなしで一昼夜の船旅で行ける利便性もあり、谷崎潤一郎、芥川龍之

5) グロボワについては、拙稿「上海から京都へ——「高博愛」(Charles Grosbois)の戦後」(高網博文ほか編『上海の戦後——人びとの模索・越境・記憶』、勉誠出版、2019年7月、105-116頁)、「上海フランス租界と関西日仏学館——第七代館長グロボワ(Charles Grosbois)を中心に」(京都大学人文科学研究所『人文学報』第117号、2021年5月、123-148頁)などを参照されたい。

6) 「日仏会館消息」『日仏文化』(新第3輯、1933年3月、211頁。同新第5輯、1933年12月、170頁)などを参照。

介、佐藤春夫、金子光晴など、著名文学者の多くが上海に来ていた。美術家や音楽家も競って上海に赴き、文化活動を展開した。ただ彼らは虹口の日本人街で活動するのが一般的であり、「河向こう」の租界との交流は総じて乏しかった。しかし言葉の壁がない芸術家なら、西洋人にも歓迎される。1935年の文化欄に、5月10日（金）の6面に、オペラ歌手のベルトラメリ能子（Yoshiko Beltramelli, 1903-1973）が上海を訪問し、虹口にある日本クラブで歌のリサイタルを開いた記事が見られる。またミラノのスコラ劇場で蝶々夫人を演じて大成功を収めた三浦環（1884-1946）が帰国途中、9月に上海でリサイタルを行う予告もあった。

日本人向けに演じられた伝統芸能も、フランス人の注目を得た。1935年8月28日（水）に、「著名な「能」楽師が昨日大成功を収めた」（《Les célèbres acteurs 〈Noh〉 ont remporté hier un très vif succès》）と題する長文は、重要ニュースを掲載する3面（1、2面は主に広告や金融関係）と、文芸欄の6面にわたって掲載された。それによると、虹口にある新亜ホテルの満員のホールで、日本の能楽が演じられ、観客の大半は「上海の日本コミュニティのエリート」たちだが、30数名のヨーロッパ人（大半が記者または国際アートクラブのメンバー）もいた。記事の執筆者はまず「日本の最もクラシックな芸術」の歴史と現状を紹介した。しかしホールにいた日本人観客の反応を見て、セリフの内容を理解できていない人が多いと感じた。にもかかわらず、「そのシンボリズムは私にとってかつて見たことのある歌舞伎と同様、理解できるもの」と述べ、「大変ドラマチックであり、表現も極めて美しい」と称賛している。続けてその日のために設けられた能舞台の様子と、自分が見た4本の演目、《Okina》《Kokaji》《Kobuuri》《Sumidagawa》の内容について詳細に紹介した。

日本側の記録を見ると、大連に海外初の能楽殿が新築されたため、舞台披露として宝生流宗家の移動公演が行われたのがことの由来である。日本の伝統芸能を植民地の人々へ大々的に披露する絶好のチャンスであり、当時の新聞などを大いに賑わせた。一行は8月17、18日に大連、8月23日に青島での出演を経て上海に来た。27日と28日に上演した演目は、初日に「翁」「小鍛冶」「隅田川」「羽衣」「望月」と狂言「昆布売り」「伯母ケ酒」であり、二日目では「熊坂」「安宅」「葵上」「乱」と狂言「寝音曲」「不聞座頭」である。主催は上海宝生會だった⁷⁾。いずれも能楽において代表的な演目だが、フランス人の記者は大変堪能しただけでなく、その音楽についても高く評価している。

音楽は風変わりで、ヨーロッパ人の耳を驚かすものだ。しかしその音楽が作り出した雰囲気は、私がこれまで聞いたもののどれよりも東洋的だった。肩や膝に寄りかけられた鼓は、動きにリズムを与え、単純で甲高い響きに緩急を付けながら、激しい振動と熱狂へ導く。そして思いがけない鋭い小笛が、嘆き、すすり泣き、歌う。演じられる劇の内容に合わせながら。（1935年8月28日，p.6）

7) 仲万美子「歌舞伎、文楽、能楽の大連公演（1935年）は誰によって鑑賞／支援されたか—現地刊行の新聞報道記事からみた分析—」、同志社女子大学『総合文化研究所紀要』第28巻、2011年、26頁を参照。

ラジオ局の仕事のために残りの3幕を見ることができないと残念がった記者は、今晚の演目も予告し、出演者たちは宝生流の最も優れた者であり、ムッシュー宝生は17代目で能楽の最も優れた伝統を代表していると述べ、長文を締めくくった。

この記事執筆したのは、4月にハワイ舞踊団を率いて上海を訪問し、そのまま上海に定住したばかりのクロード・リヴィエール (Claude Rivière, 1882-1972) だった。本名 Alice Beulin、ポーランドの首都ワルシャワの軍人家庭で生まれ、フランスで育ち、ソルボンヌでフランス文学を学んだ。第一次世界大戦後にアメリカに渡り、記者と大学教員を経てホノルルに移り、そして上海に辿り着いた、文字通り世界を股にかける女性だった⁸⁾。彼女は到着してからすぐ、日曜特集に東南アジアを紹介する長編記事を書き、その後も中国を含む世界各国の文学、音楽、美術、映画演劇、自然風俗などに関する長編記事を数多く執筆し、『法文上海日報』の最も重要な執筆者の一人となった。そしてフランス語のラジオ局「芸術と文化」(Art et Culture)の責任者にもなった。深い教養に裏付けられた文筆は美しく、アジアの文化と人々を愛する情の深さも行間から溢れ出ている。

ところで、その日の文化欄には詩人野口米次郎 (1875-1947) がインドで講演旅行を行う予告も出ている。2ヶ月後の10月21日、上海を経由した詩人は、17時間しかない滞在中、魯迅と面会し、三田会で講演したほか、共同租界のパークホテルで日本文学についての英語講演もこなした⁹⁾。講演を聞いたリヴィエールは以下のように述べている。

彼の講演を要約することができない。彼は自民族の精神と芸術生活における詩、文学生活、そして自然の役割について話した。

その雰囲気は描かれにくい。あるいは内に秘められた熱で温められた、彼の静かな口調が、ある種の雰囲気を醸し出したとでもいえよう。

聴きながら、私はかつて見た日本の庭園を思い出した。花も、木も、草もなく、ただ白い砂と石のみの庭だが、一枚のシンプルで粋な絵。

ムッシューノグチは昨夜私たちを、このような簡素でありながら高貴な、精神的庭園へ導いてくれた¹⁰⁾。

IV 戦時下の日本文化紹介

グローバルな文化交流と絢爛多彩な「海派文化」の発展が、日本の侵略によって断ち切

8) 《Mme. Claude Rivière et ses danseurs hawaïens sont revenus à Shanghai》, *Le Journal de Shanghai*, le 28 avril 1935, p.12; F. Ch. Morant, 《Dans les mers du Sud: un entretien avec Mme. Claude Rivière》, *Ibid.*, le 26 mai 1935, p.5, pp.10-11; Claude Rivière, *En Chine avec Teilhard, 1938-1944*, Editions du Seuil, Paris, 1968.

9) 《M. Noguchi a quitté Shanghai》, *Ibid.*, le 22 octobre 1935, p.6. なお野口米次郎の上海行きの詳細は、堀まどか『「二重国籍」詩人野口米次郎』(名古屋大学出版会、2012年)第12章を参照されたい。

10) Claude Rivière, 《La Conférence faite hier, au Park Hotel, par le poète japonais Noguchi》, *Ibid.*

られた。1937年8月、盧溝橋事変の翌月、第2次上海事変が勃発した。上海は3ヶ月にわたり戦場となり、租界を含む多くの地域は甚大な被害を蒙った。国民政府が首都南京から撤退し、租界以外の地域はすべて日本軍に占領され、租界は文字通り「孤島」となった。この時期においての仏語紙は、編集長による社説が代表されたように、フランス国内の世論と同調し、日本の侵略への批判が一段と高まり、日本の爆撃による被害の写真や、中国の抗日運動についての報道もしばしば掲載している。自然と日本文化の関連記事が少なくなった。それでも能楽（1939年8月20日と27日連載）や琉球諸島（1940年2月25日）を紹介する長編記事が見られる。能の歴史や鑑賞法に加えて、能面の製作についても多くの紙面を割いている。作者は不明だが、能楽に対する関心が戦時中も続いたと思われる。（図3）



図3 能楽を紹介する紙面の一部（1939年8月20日，p.3, p.10）

1940年6月、フランスはドイツ軍に占領され、ヴィシー政権が成立した。上海のフランス領事と租界当局は、駐日本大使と同様に、ヴィシー政権への服従を選んだ。しかしグロボワは仲間と「自由フランス」を設立し、上海から資金援助と義勇兵の派遣などを組織してド・ゴールの抵抗運動を支援した¹¹⁾。彼は第一次世界大戦に参戦し、負傷して右腕を失った退役軍人であり、上海に来てからは長年フランス租界の義勇団団長も務めている。

翌年の太平洋戦争勃発によって、共同租界もついに日本軍に進駐され、「敵国人」にあたる英米居留民は自由を失った。英字新聞もほぼ休刊に追い込まれた。しかし日本とヴィシー政権との良好な関係によってフランス租界は協力を一部強いられたものの、占領はされなかった。『法文上海日報』も停刊を免れ、西側のメディアとして交戦国以外の視点を提供し続けた。ヴィシー政権に媚びる姿勢が目立つ一方、日本関連の記事も一気に増大した。ただ1943年7月、フランスは租界を汪兆銘政権に「返還」し、租界全体が実質上日本の統治下に置かれて以降、『法文上海日報』は日曜特集を中止した。1944年4月より紙面自

11) 蔣傑「“自由法国”運動在上海（1940-1942）」、『史林』2016年5月、1-16頁を参照。

体が縮小し、文化欄の記事も大幅に減少した。従って日本文化の関連記事が多く掲載された時期は2年程度だった。初歩的な調査だが、主に以下のようなものが挙げられる。

1942～1943年に掲載された日本文化関連の主な記事

1942年		
4月19日 p.5	Mallarmé et les Poètes japonais (マラルメと日本の詩人たち)	S. Arukasa
5月3日 p.3, p.6	Une ambassade japonaise en Europe au XVI ^{ème} siècle (16世紀の欧州にいた日本の使節団)	R. P. Bernard
6月10日 p.1, p.5	Une belle conférence de Mme. Tatsuké à L'Alliance française (タツケ夫人がアリアンス・フランセーズで行った美しい講演) (写真付き)	R. Bernard
6月17日 p.5	Souvenirs de France, Impressions du Japon (フランスの回想、日本の印象)	Tatsuko Tatsuké Claude Rivière
8月4日 p.3	La Vie japonaise (日本人の生活)	無署名
8月7日 p.3	La Vie balnéaire au Japon (日本の海水浴場)	無署名
8月16日 p.6	Une race oubliée par les siècles: les Ainus du Japon (数世紀にわたり忘れられた民族: 日本のアイヌ族)	Kikou Yamata
9月6日 p.4, p.6	Au pied du Fuji (富士山のふもと)	Kikou Yamata
9月12日	La Vie littéraire au Japon (日本の文学生活)	Kikou Yamata
10月3日 p.3	L'Art du teinturier au Japon (日本の染色技術)	Kikou Yamata
10月4日 p.3	La Vie artistique à Tokyo (東京の芸術生活)	Kikou Yamata
10月14日 p.3	Mères du Japon (日本の母親たち)	無署名
10月21日 p.2	A la maison des écrivains japonais (日本の作家会館にて)	Kikou Yamata
11月4日 p.5	l'Empereur Meiji (明治天皇)	Tatsuko Tatsuké
11月6日 p.3	Les Arts martiaux au Japon (日本の武道)	Kikou Yamata
11月8日 p.3, p.6	La Vie théâtre à Tokyo (東京の演劇生活)	Kikou Yamata
11月27日 p.3	Comment le Japon a célébré l'Empereur Meiji (日本はいかに明治天皇の誕生日を祝うか)	Kikou Yamata
12月20日 p.3, p.6	La Musique à Shanghai: le concert de musique japonaise (上海の音楽 日本音楽の演奏会)	Ch. Grosbois
1943年		
1月3日 p.3, p.4	Un chasseur d'insectes au Japon (ある日本の昆虫収集家)	Kikou Yamata
1月6日 p.3, p.4	La Littérature française au Japon (日本のフランス文学)	Kikou Yamata
1月10日 p.3, p.6	Deux initiateurs de la peinture à l'huile au Japon: Ikuma Arishima et Hakutei Ishi (日本油絵の開拓者: 有島生馬と石井柏亭)	Conrad Meili
2月7日 p.3, p.6	L'Art du bouquet modern au Japon (日本の生花芸術)	Kikou Yamata

2月16日 p.5	Le No, théâtre des âmes au Japon （“能”、日本の魂の演劇）	Kikou Yamata
2月26日 p.5	La Vie musicale à Tokyo（日本の音楽生活）	無署名
4月13日 p.3	La Peinture à l'époque Meiji（1868-1912） （明治時期の絵画）	Kikou Yamata
5月14日～6月2日、10回連載	Les Rêves de dix Nuits（《Yume Juya》） 夏目漱石『夢十夜』	E. Fleurant
5月30日 p.5	Une grande revue japonaise en langue française: 《Connaissance du Japon》（日本のフランス語雑誌、 『日本を知る』）	G. Desmaisons Mao
6月15日 p.2	L'Exposition de peintures japonaises au Magasin Sun （大新公司の日本美術展）	G. Desmaisons Mao
8月12日 p.2	Le Nez（芥川龍之介「鼻」）	Kikou Yamata
8月18日 p.1, p.3	L'Estampe japonaise（日本の浮世絵）	Albert Audou

まず注目したいのは、1942年12月に掲載された、日本音楽の演奏会を評した「上海の音楽」である。執筆者はほかならぬグロボワだった。上海には「極東一」と評された工部局所属の交響楽団が存在し、フランス租界に位置するライシャム劇場（蘭心大戲院）を主な拠点に日曜コンサートを行っていた。プログラムを含む演奏会の詳細は常に『法文上海日報』の文化欄を通して詳細に報じられている。楽団委員会の委員も務めたグロボワは、1929年より「上海の音楽」（La Musique à Shanghai）と題する欄目を設け、シーズン中はほぼ毎週欠かさず評論を寄せている。彼はかつてパリの名門音楽学校でも学び、義肢でバイオリンを弾く音楽家でもある。コンサートを極めて専門的な見地から評するグロボワは、曲目や音楽家についても丁寧に解説し、西洋芸術音楽の啓蒙と伝播に尽力した。そのうえ日中両国の音楽にも関心と理解を示し、支援を惜しなかった。

ところで、太平洋戦争期間中は工部局交響楽団もライシャム劇場も日本の支配下に置かれ、文化工作の一環として日本の音楽家も頻繁に登場するようになった。その最たるものは、1942年12月18日（金）に太平洋戦争開戦1周年記念に合わせて行われた日本音楽演奏会である。すでに「上海交響楽団」と改名された楽団は、山田耕筰が作曲と指揮、伊藤武雄、辻輝子などの歌手が参加する定期演奏会を開いた。グロボワは長い音楽評論を書き、作曲家から歌手まで丁寧な批評を与えた。西洋音楽からの影響を受けながらも、「独創性は極めて著しい」と日本音楽を高く評価した¹²⁾。ド・ゴール派のグロボワは当然日本の侵略に批判的だが、しかしそれは彼の日本芸術への称賛を妨げていない。戦後も中国に留まったグロボワは、1953年に来日し、1959年フランスに帰国するまで京都の関西日仏学館

12) 日本音楽演奏会に関するグロボワの評論は、井口淳子『亡命者たちの上海楽壇 租界の音楽とバレエ』（音楽之友社、2019年）第5章を参照。なお戦時下のライシャム劇場における文化交流と日本との関係については、大橋毅彦・趙怡ほか編『上海租界与蘭心大戲院』上海人民出版社、大橋毅彦ほか編『上海租界の劇場文化』勉誠出版（ともに2015年）、および井口淳子『亡命者たちの上海楽壇』などを参照されたい。

館長を務め、日仏の文化交流にも尽力した。日本文学・文化関係の著作も数多く刊行したこのフランス人と日本との深い縁は、上海時代から始まったのであろう。

音楽評論とともに、夏目漱石の「夢十夜」の連載や芥川龍之介の「鼻」などの翻訳も、純粋な文学芸術を重視する仏語紙のスタンスが感じられる。一方、日本文化を紹介する多くの記事はほぼ同盟社発であり、国策新聞社が行った日本の対外宣伝の一環だったに違いない。それを大量に掲載した『法文上海日報』は、日本側の圧力を受けたとも考えられる。しかもその文化宣伝には、日本の女性作家が多く寄与したのである。

V 日本文化の報道に尽力した二人の日本人女性

Tatsuko Tatsuké こと田付辰子（1899-1957）は、駐オランダ、ブラジル大使などを務めた田付七太（1867-1931）の長女であり、3歳からパリで暮し、ソルボンヌでも学んだ。20歳で帰国してから、仏英和高等女学校に学んだ。1932年、満州事変の調査のため国際連盟から派遣されたリットン調査団の通訳も務めた。1940年末から外務省の嘱託として勤め、タイ・仏印調停会議などでフランス代表ロバン全権特使の通訳を担当し、日本軍の仏印南部進駐に至る8ヶ月余りの国際会議にも参加した。その活躍から仏領の安南王国から「三等金佩」（記章）を授与された。日本人で3人目、女性では初めてだったという。また週3回仏印向けのフランス語放送も担当した¹³⁾。

対してキク・ヤマタ（Kikou Yamata, 1897-1975）は、日本駐リヨン領事、山田忠澄（1855-1917、長崎出身）と現地の女性の間に生まれた3人兄弟の長女である。1908年、忠澄の東京転任に伴い帰国し、聖心女子学院で英語とフランス語を学んだ。卒業してからはアメリカ AP 通信社東京支局に勤務したが、父の死後、母とフランスに戻り、パリで生活した。1920年代にフランス語で多くの小説を創作し、名声を得た。主な作品に *Sur des lèvres japonaises*（1924）、*Masako*（1925）、*Les Huit renommées*（1927、藤田嗣治作挿絵47枚）、*La Vie du général Nogi*（1931）などがある。1939年日本国際文化振興会に招かれ、スイス人画家の夫と訪日している間に欧州大戦が勃発し、鎌倉に住むことになった。フランスの生活や文化を紹介する記事を書く一方、同盟社に入社して日本文化を紹介する記事も多く執筆した¹⁴⁾。

つまり二人の女性とはともにフランス語力を買われて、戦時下日本の対外宣伝に加わったといえる。そして友人同士でもあった二人は、奇しくもともに『法文上海日報』と関わっていたのである。

1942年6月10日の紙面に掲載された記事は、アリアンス・フランセーズが主催し、租界

13) 矢島翠『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』（ちくま文庫、1990年。初出は1983年）237頁、「安南王から金佩 女の名通訳・田付さんへ」『読売新聞』1941年9月6日（土）夕刊2面などを参照。

14) 矢島翠『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』などを参照。

公董局のホールで行われた田付辰子の講演についての報告である。日仏両国の要人たちが多数出席したなか、アリアンス・フランセーズ中国総代表のグロボワの名が見当たらない。ド・ゴール派の彼はこのような場面を意図的に避けたのだろうか。報告の前後に日本のニュース映画も放映され、フランス租界に対する日本の圧力が確実に強まったことを物語っている。田付辰子の講演題目は「日本の生花」のはずだったが、新聞で掲載されたスピーチの内容は、むしろフランスへの賛美と、日仏の友好を訴えるものだった。そして一週間後に掲載された「フランスの記憶、日本の印象」は、さる5月28日で行われていたラジオ対談の内容である。

すでに述べたように、アリアンス・フランセーズの傘下に、『法文上海日報』のほか、フランス語のラジオ局もあった。その責任者を務めたのは、野口米次郎の講演や能楽についての評論を書いたクロード・リヴィエールである。毎晩世界各国の文化や芸術について語った彼女の談義 (causerie) は名物番組であり、その中で上海に來訪した各国の文化人との対談もしばしば行われる。田付辰子との対談もその一つだったのだろう。二人はそれぞれの相手国への印象を述べた。タツコはフランスを「第二の故郷」として熱をこもって回想し、リヴィエールはタツコの「完璧なフランス語」に感心しながら、日本に数度旅した経験を踏まえて、日本の美しい自然、地方の人々の優しさと礼儀正しさについて語った。

一方、ヤマタが執筆した記事は1942年8月のアイヌ民族に関する紹介から始まり、歌舞伎、生け花、美術、能楽、文学と多岐にわたり、計十数点に上っている。フランス語で日本文化を全方位に宣伝しようとする彼女の意気込みが読み取れる。戦時下のキク・ヤマタについて、矢島翠『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』に詳しい。それによると、満州事変後、パリにいたヤマタは日本の戦争を擁護する姿勢を見せ、日中間の恋愛を描く長編小説 *Mille coeurs en Chine* (中国の千の心) も創作したが、侵略を美化したと批判され、出版拒否に遭い、「戦争菊」とまで呼ばれた。しかしそれがかえって彼女に世界に向かって日本の宣伝に努めようとする意思を強めさせたようである。ただ伝記では同盟通信社での仕事として、ヤマタが書いた日本の文化関係に関する記事が、「上海やハノイ外地の都市で発行されているフランス語紙に掲載されていた」¹⁵⁾と言及したものの、詳細については不明である。従って『法文上海日報』に残されたヤマタの記事は大変貴重な史料となる。

紙幅の都合によりここで詳細を論じる余裕はないが、とりわけ注目したいのは日本近代美術の紹介である。『法文上海日報』は創刊当初から世界の美術に多くの紙面を割いている。中国の近代美術への関心も深く、多数の作品写真とともにしばしば日曜特集の長編記事のテーマとしている。しかしフランスと縁の深い藤田嗣治画伯を含む、日本人画家の紹介があまり見られない。上海には常に多くの日本人画家が訪問し、絶えず画展を開いて

15) 矢島翠『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』、211-212頁。

いたにもかかわらずである。1940年5月2日から4日、フランスクラブで日本画家による美術展が開かれた時も、編集長による短い評論（4日、p.5）には作家名と作品名が記されているものの、日曜特集にある「フランスクラブにて日本現代美術展」という題目の下に付された5枚の作品写真（5日、p.11）には記されていない。しかし太平洋戦争が勃発してからは日本の美術に関する記事も増えた。なかでもヤマタとスイス人画家の夫である Conrad Meili による二篇の記事は、筆者がこれまで発見できた最も詳細なものである。（図4）



図4 ヤマタ夫婦による日本近代美術評論（1942年10月4日 p.3, 1943年1月10日 p.3, p.6）

ところで、1943年11月にヤマタ夫婦はともに特高に逮捕され、夫が強姦未遂の罪で40日、キクが容疑不明なまま3ヶ月もの拘束を受けた。前年ハノイで出版した日本紹介書『女王の国で』が問題になったらしいが、上海に寄稿した記事についても、すでに「反日で親仏的。要注意」と警告されていた。しかもヤマタ夫婦を密告したのは、ほかならぬ田付辰子だった。外務省の嘱託としてフランス語で発表された作品の検閲を担当した彼女は、友人が書いたものが「不敬罪」に該当すると判断したという。ともに外交官の娘でフランス育ち、しかも戦時下の対外宣伝に必死だった二人の女性が、このような結末になるとは、歴史の皮肉であろう。矢島翠は二人について、「キクがフランス語でのみ書いたのに対して、辰子は日本語でのみ随筆をつづ」ったため、キクに対して密かな羨望、または嫉妬もあったと述べている（238頁）。しかし筆者の調査で、辰子はすでに1935年6月より2年余り、東京で発行されていた英字新聞 *Japan Times* にフランス語の小説やエッセイを多数発表していたことが判明した。二人の女性の運命を翻弄したのは、日本とフランスという二つの国に挟まれた複雑な感情だったのではないかと思われる。

ヤマタは日本文化を精一杯称賛したとはいえ、日本語力の弱い彼女が参照した書物は、ほぼ英仏語で書かれたものであり、自然と西洋流の考え方や日本を相対化する眼差しを身につけてしまう。彼女はパリで中国の文学者とも交友があったので、日本の侵略を美化す

る節はあったものの、日中間の恋愛物語を書くことができた。しかしこのような多角的な視点と考え方は、当然戦時下に鼓吹された「唯一無二の神国」という思想とは相容れない。彼女は尋問を受けたとき、一番好きな国はどこだと聞かれると、思わず「フランス」と答えてしまったという。対して「純粋な」日本人の辰子が上海で語ったフランスへの熱い思いも、日仏の混血児だったヤマタに劣ってはいない。パリで初等、中等、さらには高等教育まで受けた辰子は、精神的にフランスから多くを学んだはずである。従って友を揄奨したのも、単なる嫉妬でなく、使命感による部分もあったと同時に、その行動によってフランスへの愛情を打ち消そうという気持ちも動いたからかもしれない。

結び

上海租界の外国語新聞といえば、従来筆頭に挙げられたのは *North China Herald* (1850-1941、『北華捷報』) や *North China Daily News* (1864-1949、『字林西報』) などの英字新聞であり、近年『大陸新報』(1939-1945) などの日本語新聞も注目を集めつつある。対して『法文上海日報』においては、専門家の間でもほとんど知られておらず、先行研究も僅少である。

しかし以上のような初歩的な考察だけを通して、この新聞の歴史価値と特徴を垣間見ることができるだろう。租界史研究の重要な史料宝庫であるだけでなく、日本との関係も密接であり、上海を結節点とした日仏中3か国の文化交流史研究においても、欠くことのできない史料源に違いない。また植民地主義の色合いが強かった英字新聞や日本の新聞に比べて、仏語紙が持つアジア文化を重視する文化欄の豊富さと多彩さは際立つ。しかも、戦時下に日本側の圧力を受けて日本の対外宣伝の一役を強いられていた状況であっても、優れた多国籍の執筆陣によって日本の伝統文化や文学芸術の紹介に力を入れており、「大東亜戦争」擁護一色に染まっていた戦時下における他のメディアとは、一線を画していたといえよう。

上海租界のフランス語新聞 *Le Journal de Shanghai* が報じた日本文化

趙 怡

上海の租界史研究は長い間、中国では反帝国主義・反植民地主義の立場から批判的に行われ、日本では日本人居留民への関心から行われた傾向があった。フランス租界に関しては、言語の壁もあり、とりわけフランス語資料に基づく研究は極めて不足している。『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』（*Le Journal de Shanghai*, 1927-1945、中国語名「法文上海日報」）は、発行期間が18年間に及び、かつ豊富な文化欄を持つ日刊紙であるにもかかわらず、上海史専門家の間でもほとんど知られておらず、先行研究も僅少である。しかし筆者の調査により、この新聞は、フランス租界の様相をリアルタイムに報告する貴重な資料源であるだけでなく、国際都市上海で繰り広げられていた東西文化の交流の実態を示す史料の宝庫でもあることが判明した。

本論はこのフランス語新聞に掲載された日本文化に関する記事についての考察である。戦前の観光地としての日本の印象から、日本文化に対するより深い認識を経て、戦時中に急速に増大した日本文化の全面的な宣伝に至る軌跡を辿りながら具体的に検証した。そのうえ日本側の圧力に屈せず、アジアの芸術文化の伝播に貢献した日仏両国の優れた執筆者たちの活動も明らかにした。それにより、上海のフランス租界と日本との深い関係についてもある程度実証できたと思われる。

本稿は科学研究費助成金基盤研究（C）（課題番号18K00498）および基盤研究（B）（課題番号20H01302）による研究成果の一部である。